

試験研究(中間)評価整理表

試験研究機関名 環境創造センター
所 管 課 環境共生課

No.	施策目標等		試験・研究課題名	試験研究始期・終期		予算額 当初予算(計画)額(千円)	具体的評価項目				総合評価		部局コメント	外部アドバイザーコメント
	施策目標	研究課題分類		始期	終期		評価時までの進捗状況	内外の状況変化	成果の見通し	1次評価	2次評価			
1	環境回復	研究開発事業 (除染・廃棄物)	除去土壌等の保管等に係る適正管理手法の確立	H27	R3	34,664	B	B	B		B	B	除去土壌の保管が長期化する市町村があることから、仮置場資材の耐久性評価試験結果データは非常に重要であり、今後も事業の継続が望まれる。今後増加する仮置場の原状回復に向けて試験研究で得られた成果を市町村等に発信していくことが求められる。	福島県として実施するテーマとして相応しく、その視点でのきめの細かなアプローチに好感が持てる。学術会議での発表を繰り返し、外部専門家との意見交換、情報共有も並行しているため、現時点までの研究のプロセスは適切と考える。今後さらに「HP、学会、論文等様々な形式で公表」とあるが、すでに実績のある「三春秋祭り」のような県民が集う機会でのアウトリーチ活動や、メディアを通じた発信もより積極的に継続し、拡大されることを期待したい。
2	環境回復	研究開発事業 (環境動態)	放射性核種の環境中における移行挙動の実態把握及び将来予測に関する研究	H27	R3	51,363	B	B	B		B	B	移行挙動予測において、平水時及び出水時の実測を再現したことは評価できる。モデルの広範囲な適用の検討に加え、社会情勢や突発的事象への対応及び放射性物質のみにとられない派生的な成果を見通した研究を実施すべき。	河川上流では、森林は除染されない状況が今後も続くと考えられる。他の国の機関では継続したモニタリングが行われていないことから、今後とも河川における放射性セシウム濃度の基礎データを県の研究機関として取得の必要性は極めて高い。モニタリングにより注力することにより、結果として多様な外力に伴う放射性セシウムの流出の実態が把握できると考えられる。また、調査結果の信頼性を担保するためにも、学会発表に加えて、論文として受理されることが求められると考え、積極的に論文投稿をお願いしたい。
3	環境回復	研究開発事業 (環境動態)	野生動物に対する原子力発電所事故の影響に関する研究	H27	R3	61,678	B	B	B		B	B	解析に必要な調査個体数を増やしつ、調査結果の確度を高め、野生鳥獣対策等に活用するため、放射線核種濃度調査及び生息状況調査等を引き続き実施することが望まれる。	今後の対策を考える上でも、基礎的な動物のセシウム濃度データを蓄積していくことに大きな意義がある。一方で、社会への研究成果の還元の意味でも、プロセス研究を行うことよりは、他の調査事例を調査し、集約することの重要性が高いと考えられるため、データの集約に心がけていただきたい。また、調査結果の信頼性を担保するためにも、学会発表に加えて、論文として受理されることが求められると考え、積極的に、論文投稿をお願いしたい。
4	環境回復	研究開発事業 (環境創造)	正確な情報の効果的な発信のあり方に関する研究	R1	R3	1,602	B	B	B		B	B	様々なアンケート調査を解析し、情報の受け手を意識した発信方法を検討したことは評価できる。環境配慮活動を促す情報発信のあり方についての検討が実装されることにより、活動の促進が期待されるため、継続すべきである。	アンケートの内容、分析手法や検討のプロセスに関する情報がないので、研究内容に関する具体的な評価は困難ではあるが、進捗状況欄の記述および学術論文の投稿実績、学会研究発表会等での発表実績によれば、研究活動の順調さを読み取ることができる。結果のみならず、分析上の工夫や他者が実施している同種のアンケート等との比較検討までも踏み込んで、本研究成果を特徴づける分析にも今後期待したい。

試験研究(中間)評価整理表

試験研究機関名 ハイテクプラザ

所 管 課 産業創出課

No.	施策目標等		試験・研究課題名	試験研究始期・終期		予算額 当初予算(計画)額(千円)	具体的評価項目				総合評価		部局コメント	外部アドバイザーコメント
	施策目標	研究課題分類		始期	終期		評価時までの進捗状況	内外の状況変化	成果の見通し	1次評価	2次評価			
1	医療関連産業など、 本県の再生の推進力 となる産業の集積	チャレンジふくしま「ロボ ット産業革命の地」 創出事業	狭隘内部空間 の三次元構造 復元に関する 研究開発	31	2	28,485	B	A	B		B	B	進捗の遅れはあるものの、ミリ波レーダと算出する距離画像との融合は、目標値内の誤差で実現できる見込みである。	橋梁等のインフラの点検には十分な精度が得られているように感じられる。ニーズが高い分野であり、拡充して継続することを勧めたい。 適用範囲が広い技術であるため、更なる精度の向上や移動しながらの計測といった研究の継続は必要である。一方で、現在の精度で十分な対象を見つけ、現場で実績を積むことも必要と考える。自律・自走して検査を行う機器の実現が最終目標であるとして、まずは目視検査の補助機器としてデビューするのも良いのではないかと思う。

試験研究(中間)評価整理表

試験研究機関名 福島県林業研究センター
 所 管 課 農業振興課

No.	施策目標等		試験・研究課題名	試験研究始期・終期		予算額 当初予算(計画)額(千円)	具体的評価項目				総合評価		部局コメント	外部アドバイザーコメント
	施策目標	研究課題分類		始期	終期		評価時までの進捗状況	内外の状況変化	成果の見通し	1次評価	2次評価			
1	農林水産資源を活用した地域産業の6次化の推進	地域資源の特徴を生かせる栽培加工技術確立	山菜類の選抜と栽培方法	平成30年度	令和4年度	11,000	B	B	B		B	B	震災以降、売り上げが低迷している山菜において、商品力のある山菜は必要な状況である。研究は順調に進捗しており、来年度も継続されるべきである。	山菜の利用・販売拡大は山村経済にとって重要な位置を占める。県内には震災の影響で出荷制限を受けた地域も多く、汚染が低下しても福島県産の山菜の販売は苦しい状況にある。 本研究では、ワラビとアケビの品種、栽培法について検討している。山菜を品種で評価するためには、遺伝的な特性とともに栽培環境の影響も加味する必要がある。 栽培場所として農地を想定するか、林地を想定するかで技術開発の方向は異なるだろう。 ワラビ、アケビ以外の山菜については、地域固有の利用が商品としての価値を高まるだろうが、採集圧力が高まると自然の持続的な利用が困難になる。一定の需要が見込める山菜の品目を広く検討するとともに、地域ごとの戦略(栽培か、採集か、あるいは林地での生育強化か)を立て、それを支援する研究が必要ではないか。